

# 国際的環境文化財としての俳句、俳句指導に関する研究

## SDGs、ESDと文学教育との関係から

Research on Haiku and Haiku Instruction as Global Environmental Cultural Property  
From the Relationship between SDGs/ESD and Literature Education

中 島 賢 介

### 要旨

以前執筆した「国際的環境文化財としての俳句」という論考の続編として、俳句創作と創作指導という言語活動が持続可能な開発目標（SDGs）と持続可能な開発のための教育（ESD）に関連させることができるということを論じる。SDGsとESDの意義、歴史的背景と2つの関連を確認した上で、俳句創作や俳句指導の特徴である季語、吟行、座の文芸という要素が持続可能な開発のために資する可能性があることを指摘する。これからの俳句創作や俳句指導の現場においても、SDGsやESDの観点を踏まえた教育を行うことが求められる。

キーワード：文学教育（Literature education）／持続可能な開発目標（SDGs）／  
持続可能な開発のための教育（ESD）／俳句（HAIKU）／俳句指導（HAIKU instruction）

### I はじめに

以前、所属する俳誌（2008）に「国際的環境文化財としての俳句」という論考を寄稿した。具体的には、俳句は国内のみならず世界各国でHAIKUとして創作されていること、またHAIKUが持つ自然を詠むものであるという性質から環境問題に直結することを主張した。

今回は、この論考の続編として、俳句の創作と創作指導が持続可能な開発のための教育「ESD」や持続可能な開発目標「SDGs」を達成するための非常に有効な取り組みとなり得るということを考察する。

### II ESD、SDGsの意義、歴史的背景

まず、「ESD」や「SDGs」の定義や特徴について概観しよう。文科省はESDについて次のように解説している。

ESDはEducation for Sustainable Developmentの略で「持続可能な開発のための教育」と訳され

ています。今、世界には気候変動、生物多様性の喪失、資源の枯渇、貧困の拡大等人類の開発活動に起因する様々な問題があります。ESDとは、これらの現代社会の問題を自らの問題として主体的に捉え、人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、身近なところから取り組む（think globally, act locally）ことで、問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらし、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動です。

つまり、ESDは持続可能な社会の創り手を育む教育です。

高橋ら（2021）は、「ESDの取り組みでは、環境、平和など地球規模での現代的課題を自らの問題と捉え、身近なところから取り組むことにより、それらの問題の解決につながる新たな価値観と行動を生み出すことが期待される。そしてそのために必要となる、インプットとアウトプット両面にわたる学習活動を提供することが求められている。さらに、ESDでは、環境、平和の各側面から学際的かつ総合的に取り組み、他人との関係

性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、『かかわり』や『つながり』を尊重できる個人を育むことをめざしている。」と述べている。

一方、外務省はSDGsについて次のように解説している。

SDGsとは、持続可能な開発目標（SDGs）とは、2001年に策定されたミレニアム開発目標（MDGs）の後継として、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さない（leave no one behind）ことを誓っています。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル（普遍的）なものであり、日本としても積極的に取り組んでいます。

SDGsの基礎となったMDGsの目標は、次の8項目で構成されている。

- 1 極度の貧困と飢餓の撲滅
- 2 普遍的初等教育の達成
- 3 ジェンダーの平等の推進と女性の地位向上
- 4 幼児死亡率の削減
- 5 妊産婦の健康の改善
- 6 HIV／エイズ、マラリアその他疾病の蔓延防止
- 7 環境の持続可能性の確保
- 8 開発のためのグローバル・パートナーシップの推進

SDGsが提案された2012年の段階では、国内においてはMDGsとの違いに混乱をきたさないような配慮があったようである。佐藤真久ら（2012）の主張から、次のような記述が見受けられる。「日本政府は、『国連持続可能な開発会議（リオ+20）成果へのインプット』と題する政策文書を発表し、あえて概念的混乱をさけるためにSDGsという言葉をしよしないものの、UNCSD40（リオ+20）は、2015年以降の包括的な国際開発目標（ポストMDGs）を策定する上で重要な機会として位置づけている。

SDGsの目標とは、次の17項目で構成されている。

「1 [貧困] あらゆる場所あらゆる形態の貧困を終わらせる」「2 [飢餓] 飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養の改善を実現し、持続可能な農業を促進する」「3 [保健] あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する」「4 [教育] すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」「5 [ジェンダー] ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児のエンパワーメントを行う」「6 [水・衛生] すべての人々の水を衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する」「7 [エネルギー] すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的なエネルギーへのアクセスを確保する」「8 [経済成長と雇用] 包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用（ディーセントワーク）を促進する」「9 [インフラ、産業化、イノベーション] 強靱（レジリエント）なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る」「10 [不平等] 国内及び各国家間の不平等を是正する」「11 [持続可能な都市] 包摂的で安心かつ強靱（レジリエント）で持続可能な都市及び人間居住を実現する」「12 [持続可能な消費と生産] 持続可能な消費生産形態を確保する」「13 [気候変動] 気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる」「14 [海洋資源] 持続可能な開発のために、海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する」「15 [陸上資源] 陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する」「16 [平和] 持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する」「17 [実施手段] 持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する」

また、SDGsの重要なポイントとして、「目標が地球規模である」、「目標となる未来を定めて今何

ができるかを考える」、「誰一人として取り残さない」の3つが挙げられる。すなわちSDGsの取り組みは、一つ一つの規模や内容は異なるが、その一つが国内だけの取り組みではなく地球規模の取り組みであり、目標となる未来に貢献するものであり、誰しも恩恵に与ることができる取り組みであるという点で重要な意味を成すということが分かる。

安藤（2019）は、「SDGsに関わる企業や事業団体としても、SDGsによって『企業イメージの向上』『社会的課題への対応』『生存戦略への架橋』『新たな事業機会の創出』などが見込まれ、業績アップも期待できることを理解して、積極的な対応をしてもらいたい」と述べている。

村上ら（2019）は、「SDGsには、企業経営の視点からは、事業開発・拡大、人材獲得、コミュニケーションツールとしての魅力を感じることができます。また、最近広がっているESG（環境、社会、ガバナンス）投資との関係も深く、上場企業に加えて非上場企業にもSDGsの取り組みが広がっています」と述べている。また、「目先の利益ばかりを追うような企業や個人の意思決定や、国や自治体の政策選択の積み重ねが、サステナブルではない社会を作ってしまう。これでは、現時点で大きな声を出せない子どもたちなど将来世代や自然環境はどうしても割を食ってしまいがちです」と述べている。蟹江（2020）も、同様に企業のCSR（企業の社会的責任）とCSV（共通価値創造）との関係や自治体と地方創生の観点などからSDGsの取り組みの重要性について詳細に述べている。

入門書を見る限り、教育現場というよりも企業や自治体に向けて出版されたものが多いのが特徴であるといえる。

加えて、高井ら（2020）は、OECDが企業のSDGsの17のロゴをホームページに掲載しながらも、具体的な活動にまで落とし込まれていないなど、みせかけだけの取り組みを「SDGsウォッシュ」と指摘していることを挙げ、「SDGsウォッシュ」の原因を社会に与える影響や防止策についても触れている。

また、SDGsに関するさまざまなデータを集めて具体的な取り組みを促す主張としては、高須ら

（2019）によって構成された「日本の人間の安全保障指標プロジェクトチーム」が国内のデータを基に指標を示したり、イヴェットら（2020）による世界のデータによる実態把握と各国の取り組みが紹介されていたりするものが挙げられる。

蟹江ら（2017）も『持続可能な開発目標とガバナンスに関する総合的研究 ―地球の限られた資源と環境容量に基づくポスト2015年開発・成長目標の制定と実現へ向けて』において4年間にわたってプロジェクトを組み、その成果を指標、教育、保健衛生、エネルギーと気候変動、環境と経済発展の面からアプローチし、実施に向けて検討している。

さまざまな国際問題に対する取り組みの概念として、「環境と開発に関する世界委員会」が「我ら共有の未来」において「持続可能な開発（SD）」を提唱した。そして、そのための教育がESDであり、「環境と開発に関する国連会議（地球サミット）」において、具体的な行動計画「アジェンダ21」を採択し、MDGs、SDGsへと発展してきた。ESDとSDGsの関係については、以上に元々国連内においても環境開発会議とUNESCOと協議された場合は異なるが、現在では、それらが融合して推進されている。

ただ、国内の環境教育においては、「1960年代以来の環境破壊をもたらした元凶は『経済開発』であり、『国土開発』であり、『日本列島改造計画』」であると考えられてきたため、長らく「開発」については議論されなかった経緯があると指摘されている。

しかし、国連総会において「ESD for 2030」が決議された際、ESDは質の高い教育に関する開発目標（SDG）に必要不可欠な要素であり、その他の全てのSDGsの成功への鍵として、SDGsの達成の不可欠な実施手段であることということが明記されている。

岡崎ら（2020）も「ESDとSDGsは従って『手段』と『目的』の関係にあ」と述べている通り、教育の場ではESDに沿った教育体制を構築することで、SDGsの目標を遂行する社会人を養成することが求められている。



### Ⅲ ESD、SDGsの教育現場への先行事例

鈴木一成ら(2020)は、学校教育のSDGsの実践例として、体育科と国語科教育の横断的学びの成果を報告している。具体的には、環境問題が他人事から自分事へと変容したこと、自己内対話で一番近い感情を探ることなどを検討することができたとしている。

佐藤洋一ら(2020)は、小学校6年生国語科学習を例に、「持続可能な社会の創り手」の育成(SDGs)、児童の創造的な「課題発見・解決能力」を育てるとともに、教科を学ぶ意義(見方・考え方)とのつながりが明確な総合的探究的学習システム、評価方法の開発等の実践提案をしている。

他にも多くの学校でユネスコスクール(世界182か国115,000校、国内1,120校)が加盟しESD、SDGsに関する教育活動が実施されている。NII学術情報ナビゲータ(CiNii)においても2021年9月21日現在117件の研究・論考・実践報告が閲覧できる。

### Ⅳ 俳句の持つ特徴 — 季語 —

俳句の数量的研究については、1990年代から分析が行われるようになった。ただ、「世界最小の詩」ということもあり、毎年膨大な作品が生み出されるため、それらをデータベース化して研究しようという試みが実際に行われたのは今世紀初頭になってからである。吉岡(2000)は、「季語データベースの構築と俳句の季語の自動判定の試み」という報告を発表している。現在、国際日本文化研究センター(日文研)では、ウェブサイト上に三万五千以上の季語を収録したデータベースを公開している。

俳人の黛まどかは文化庁の文化交流使として「HAIKU~世界一短い詩に込められた日本人の心~」と題した講演会で次のように述べている。

どの国にも固有の自然と自然観があると思いますが、日本にも固有の自然観があります。それは、自己と自然を一体化するという自然観です。これが季語の育まれた土壌です。(略)日本人が、自然が移ろうすべての様を最初から最後まで、一部始終を愛でて愛でて愛でて尽くしてきたということをこういった季語が証明してい

ると思います。(下線は論者)

黛に限らず、松瀬青々も「俳句というのは自然に対する感激である」と述べるなど、俳人たちの季語への造詣は自然に対する愛着以外の何物でもない。内田園生は、「とすれば、外国人だってそれぞれの国に季節の変化があるわけですから、外国人には俳句は作れないなんという理由はないと思いますね。(下線は論者)」と確信も持って語っている。これは、その国に例え日本のような明確な四季の移ろいがなくても、乾季と雨季でも、それぞれの季語が成立する可能性を示唆した発言であると考えられる。

中村草田男の「自覚的自然愛」と題した講演については、以前考察したことがあるが、この講演によると、小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)は『日本印象記』で日本人はみな自然に親しむ国民であるとしているが、昨今の自然破壊が繰り返されている現代においてそれは買いかぶりである。自然を意識的に享受せず、闇雲に開発し続ける姿勢が環境破壊を招いていることを指摘している。

自然を愛さない人間は、その自然と結びついた土地を愛さない。観光というような以外に、しみじみと自然愛を自覚する人々によってこそ、やはりその土地への愛情も自覚されるようになります。自然を愛さない人々からは、その土地に連なったわれわれの先祖たちが、その土地でただ一回の人生をどのように生きてきたかという歴史やその遺跡への関心も消えてしまっ

てゆくのです。俳人の中では、草田男のように季節を詠む俳句の世界観から「玉川上水を守る会」などの自然保護運動に共鳴する者が現れた典型であるということができる。この態度は、地域の活動から延いては、MDGsの「7環境の持続可能性の確保」やSDGsの「13気候変動」「14海洋資源」「15陸上資源」という目標に繋がっていく可能性が示唆されていると考えられる。

### Ⅴ 俳句の持つ特徴 — 吟行 —

また、草田男は「自覚的自然愛」の講演の中で、「江戸名所—自然の人工的歪曲」と題して、江戸時代から続く東京の名所は「盆栽化されて鉢植化された人工的娯楽の場所」となっている、こ

のような場所は人工的に歪曲された自然であり、生きた自然ではないと主張している。芭蕉はこうした歪曲された自然から抜け出し、『奥の細道』に見られるように、旅に出かけることによってそのままの自然の魅力に接することができたとしている。これは、限定された範囲での自然では「自覚的自然愛」は育たないという指摘であると考えられる。

この提唱から四十年が経過した平成十九年、俳人協会においても、「俳人協会会報」No.433五月五日号から「自然環境ウォッチング」が始まり、翌年九月から環境委員会が設置された。会報No.451には、「環境問題の重要性は誰もが認識していることではあるが、問題は俳人としてできることは何かという点に集約される」として「いくつかの案もでた」とのことであった。その後、環境委員会はジュニア俳句教室や各地における俳句セミナーを開催し、環境問題に関与している。「環境保護の必要性を、琵琶湖の現場に立って体験する俳人のセミナーです。これからの自然・環境保護は現場発想。その体験が作句活動に命を吹込みます。」（琵琶湖一泊二日俳句セミナー）、「世界遺産「白神山地」の自然を体験しながら学び、考え、俳句を詠むセミナーです。自然・環境の原点、白神山地の息吹を浴びて元気をもらい、俳句に命を吹き込みましょう。」（白神山地俳句セミナー）、「歴史と伝承の奈良・吉野の東、南朝ゆかりの山間「東吉野村」の自然を体験しながら学び、考え、俳句を詠むセミナーです。森林の息吹を浴びて元気を貰い、俳句に命を吹き込みましょう。」（東吉野村一泊二日俳句セミナー）など、「俳句に命を吹き込む」という言葉が統一したフレーズとなっている。

ところで、『現代俳句大事典』では、吟行について次のように解説されている。

詩歌、俳句を作るため、野山に出掛けること。近代俳句で、吟行が作句法として明確な意味を持ったのは、正岡子規が、一八九四（明二七）年秋、根岸の郊外を散歩して作句した時であろう。子規は「写生的な妙味は此時に始めてわかつた気がして嬉しかった」（『獺祭書屋俳句帖抄』）と述べている。この基本的な即興多作の方法を、その場での句会と結びつけ、作句

法として完成させたのが高浜虚子である。虚子は、一九三〇年八月、東京・府中、大国魂神社前の櫛並木で「武蔵野探勝」を始め、「ホトトギス」誌上に次の如く述べている。「吟行会を催して、其等武蔵野の俳を尋ね、句を徴し、文を綴つて見ようと思ひ立つた」。以後毎月吟行会を重ね、百回継続されることによりその妙味と実作が得られ、作る方法として定着した。

先人たちが旅をしながら句を詠んだように、俳句が机上での創作だけでなく、自然の息吹を浴びることで句の生命が脈打つことに気づいた俳人たちは、その後各地の名勝旧跡などをまとめて吟行案内を発行する。俳人協会の吟行案内は、現時点で三十五巻を数えるほどになる。他の俳句団体のものを合わせると相当な数になる。いずれにせよ、こうした全国的展開を見せる背景には、俳人たちの高い環境意識があったことと決して無関係ではない。俳句創作と環境意識とはそれほど親和性の高い関係がある。

吟行を行う姿勢は、先述した季語同様、MDGsの「7環境の持続可能性の確保」やSDGsの「13気候変動」「14海洋資源」「15陸上資源」に加え「11持続可能な都市」という目標に繋がっていく可能性が示唆されていると考えられる。

## VI 座の文芸

他の文芸ジャンルにおいては、同人誌などで志を同じくする者で切磋琢磨するという風土はあるにはあるが、創作においてはあくまでも個が強調される。しかし、近世俳句で芭蕉たちが目指したものは、個よりも座であった。勿論それは、目指す俳句を普及するという戦略的な意図がなかったわけではない。しかし、座は戦略の域を超えて、創作者の基盤作りに大きく寄与し続けてきた。『現代俳句大事典』では、「座」を次のように捉えている。

連歌や俳諧の会席が座で、それに参加することを一座という。一座を構成する人々を連衆といい、連衆には共通の風雅を求めるという強い連帯感がある。俳諧は座によって生まれるから、特に座の文芸という。俳諧が、孤独な発想によるより、同好の士による一座の中で醸じだされた共有の詩情を基盤として発想されること

が多いというその本質を示している。俳諧として江戸時代に普通に作られたのは連句で、複数の作者によって生みだされる連句が座の気分なしには成り立たないということはいうまでもないが、その連句から生まれたものとして、一人で作る発句（俳句）もまた座の気分なくしては考えられない。俳句を成り立たせる上で欠くことのできない季語の働きも、さまざまな約束の上に成り立っているが、約束は座の基盤が有効である。座の文芸とは、もともと江戸時代の俳諧についていわれたことだが、近代の俳句も深くそこに根差していると考えられる。

（下線は論者）

俳句の世界では、結社は「一定の文学理念の下に、主宰者を戴き、俳句雑誌を出すことを目的として集まった作家集団を指す」（『現代俳句大事典』）。現在は強い師弟関係よりも、「複数の結社に所属することは稀ではない」とあるように、気軽に参加できる集団になりつつある。

八亀（1974）は、「『座』という語は大きな広がりを持ち（ママ）、私が（略）とりあげた『共通領域』はもとよりのこと、結社や俳壇、さらには国民性・風土にまで拡大することが可能である。」と述べている。

国立教育政策研究所がまとめた報告書によると、ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度について、次の七つ挙げている。「批判的に考える力」、「未来像を予測して計画を立てる力」、「多面的・総合的に考える力」、「コミュニケーションを行う力」、「他者と協力する力」、「つながりを尊重する態度」、「進んで参加する態度」。この中で、座を成り立たせようとする句によるコミュニケーション、協調性、つながりを尊重し進んで参加する態度などが、座という文化によって育むことが可能である。

さらに、SDGsにおいては、「17実施手段」という目標がある。元来これは、先進国と開発途上国とのパートナーシップを前提にしている。だがこの場合、先述した通り、SDGsの重要なポイントとして、「誰一人として取り残さない」とあるように、集団の中から取り残される人を出さないという「個」と「集団」のことを指していると理解したい。集団の中にありながら、個としての存在

を認め合い尊重するということは、座の文芸が発展してきた歴史そのものであるといえることができる。

## VII 今後の展望

論考「国際的環境文化財としての俳句」に加えて、本論で取り上げたESDやSDGsの理念や姿勢から俳句創作について考察した。

白砂（2020）は、SDGsの実現するためにランドスケープの視座を提唱している。彼の主張は、地球、世界、そして日本のランドスケープに焦点化され、日本の精神文化として「吾唯足知」があり、仏教の「山川草木悉皆成仏」などの思想、「花鳥風月」の自然観などが言及されている。「今や海面上昇、砂漠化、熱帯林の減少、生物多様性の減少、伝染病の蔓延などの地球環境の変化が人類の存続を危うくさせている。科学技術はそれらの回復に対処療法としての機能は果たすに違いないが、本来治療しなければならないのは、欲望に慢心する人々の心の在りようである。しかし残念なことに、（略）現代人の心からは自然に対する意識は薄れ、経済発展だけに人々の意識は集中している。このような現状に対して、自然の象徴であり最も身近な存在である花が「心の治療薬」「精神の安定剤」として有効に働きはしないだろうか」と述べている。高村光太郎も、「私の詩は自分では自分にとっての一つの安全弁であると思っただけ」と語っている。

俳句を詠む側からすれば、ちょっとした趣味程度から創作を生業にまで発展させていくという幅広い取り組みがあるだろう。俳句と人との関係は多様であり、人それぞれであるといえることができる。それらすべてを包括して、俳句創作を自分自身の営みであるという狭隘な考え方から、座の営みへ、そして次世代以降の日本のみならず世界の環境意識へと拡大させて考察してみた。詠まれた作品の質や量の如何に関わらず、俳句を詠むということ自体が世界を変えることにつながっていくのである。

現在、日本全国の結社は生成消滅を繰り返しながらも増加傾向にあると言われている。しかし、それを継続発展させていくためには、世代を超えた俳句創作に関する新たな認識が必要である。本



論は、日本の伝統文化の一つである俳句を取り上げてESD、SDGsの視点を獲得すれば、より一層「主体的・対話的で深い学び」が得られる文学教育が展開できるのではないかという可能性を示唆した。具体的な单元など詳細な導入について今後の課題としたい。

〈引用文献・参考文献〉

- 安藤顯 (2019) 『SDGsとは何か? 世界を変える17のSDGs目標』三和書籍
- 稲畑汀子・大岡信・鷹羽狩行監修 (2005) 『現代俳句大事典』三省堂
- イヴェット・ヴェレ、ポール・アルヌー、蔵持不三也訳 (2020) 『地図とデータで見るSDGsの世界 ハンドブック』原書房
- NPO法人「人間の安全保障」フォーラム編、高須幸雄編著 (2019) 『全国データ SDGsと日本 誰も取り残されないための人間の安全保障指標』明石書店
- 岡崎裕・山口康平・松本桂 (2020) 「2020年度 共同研究事業 和歌山大学を中心とした『ESD for SDGsコンソーシアム』の推進」『和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書』p.49-54
- 外務省 「ミレニアム開発目標 (MDGs)」 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/doukou/mdgs.html> 2021年9月21日閲覧
- 外務省 「持続可能な開発目標 (SDGs) と日本の取組」 [https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/SDGs\\_pamphlet.pdf](https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/SDGs_pamphlet.pdf) 2021年9月21日閲覧
- 蟹江憲史 (2020) 『SDGs (持続可能な開発目標)』中公新書
- 蟹江憲史編著 (2017) 『持続可能な開発目標とは何か 2030年へ向けた変革のアジェンダ』ミネルヴァ書房
- 現代俳句協会 「現代俳句データベース」 <http://www.haiku-data.jp/kigo.php> 2021年9月21日閲覧
- 公益社団法人俳人協会編 (2012) 『俳人協会の歩み 記録で綴る五十年 (追補編)』梅里書房
- 国立教育政策研究所 (2012) 「学校における持続可能な発展のための教育 (ESD) に関する研究 [最終報告書]」
- 国際日本文化研究センター 「データベース 季語検索」 <https://db.nichibun.ac.jp/sp1/ja/category/kigo.html> 2021年9月21日閲覧
- 五島敦子・関口知子編著 (2010) 『未来をつくる教育ESD 持続可能な多文化社会をめざして』明石書店
- 佐藤真久・阿部治編著、阿部治・朝岡幸彦 (2012) 『持続可能な開発のための教育 ESD入門』(持続可能な社会のための環境教育シリーズ [4]) 筑波書房
- 佐藤洋一・加藤洋祐 (2020) 「創造的な『課題発見・解決能力』を育てる探求型国語科学習 - 私たちが世界を変えていく、SDGsへの挑戦-」『名古屋学芸大学研究紀要 教養・学際編』第16号 p.1-20
- 社団法人俳人協会編 (1996) 『俳句を語る』梅里書房
- 鈴木一成・中嶋悠貴・尾関里都 (2020) 「教化等横断的な体育の学びに関する実践事例 - 世界規模の海洋プラスチックごみ問題に着目して-」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』第5巻 p.145-151
- 鈴木敏正・佐藤真久・田中治彦編著、阿部治・朝岡幸彦監修 (2014) 『環境教育と開発教育 実践的統一への展望: ポスト2015のESDへ』(持続可能な社会のための環境教育シリーズ [5]) 筑波書房
- 高井亨・甲田紫乃 (2020) 『SDGsを考える 歴史・環境・経営の視点からみた持続可能な社会』ナカニシヤ出版
- 高橋健司・久保田秀明 (2021) 「生命の価値に触れる自然体験教育のSDGsの視点からの考察」『教育論集』第73号創価大学教育学部・教職大学院 p.189-205
- 高村光太郎 (1989) 「自分と詩との関係」『昭和文学全集』第4巻 小学館
- 中島賢介 (2008) 「国際的環境文化財としての俳句」『風港』第5巻第7号 p.64-68
- 中村草田男 (2002) 「自覚的自然愛」『講演集 俳句と人生』みすず書房 p.135-162
- 西井麻美・池田満之・治部眞里・白砂伸夫 (2020) 『ESDがグローバル社会の未来を拓く SDGsの実現をめざして』ミネルヴァ書房
- 八亀師勝 (1974) 『蕉風俳諧における座の意識』桜楓社
- 平井照敏 (1984) 「俳句の本質 11 座の文芸」『国文学解釈と教材の研究 俳句創作鑑賞ハンドブック』12月号臨時増刊号 p.26-27
- 村上芽・渡辺珠子 (2019) 『SDGs入門』日経文庫
- 吉岡亮衛 (2000) 「季語データベースの構築と俳句の季語の自動判定の試み」『情報処理学会研究報告. CH, [人文科学とコンピュータ]』第48巻 p.57-64
- 吉岡亮衛 (2001) 「季語データベースの構築と俳句の季語の自動判定の試み(2) - 季語の増補と判定率の向上 -」『情報処理学会研究報告 [人文科学とコンピュータ]』第49巻 p.17-24

黛まどか (2010) 「HAIKU～世界一短い詩に込められた日本人の心～」日本語教育基金 <https://www.nf-jlep.org/topics/research/421.html> 2021年9月21日閲覧

文部科学省 「持続可能な開発のための教育 (ESD : Education for Sustainable Development)」 <https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm> 2021年9月21日閲覧

文部科学省 「ユネスコスクール」 <https://www.unesco-school.mext.go.jp/> 2021年9月21日閲覧

八亀師勝 (1974) 『蕉風俳諧における座の意識』桜楓社

UNITED NATIONS 「THE 17 GOALS」 <https://sdgs.un.org/goals> 2021年9月21日閲覧

UNESCO 「Education for Sustainable DevelopmentA roadmap」 <https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000374802.locale=en> 2021年9月21日閲覧